

存の方法をも講じなければならぬこゝと思ふ。支那の他地方にも經石の存せぬことはないが、今は何れも殘缺で、多くも數十石に過ぎぬ、房山の如く累々として存するものは他に其類を見ないのである。是れ實に大同の靈像と共に天下の至寶といはなければならぬ。(未完)

君府の思ひ出

文學博士 坂口 昂

一 私の土耳其帽

専門の研究を離れないで簡易平明を旨とする「雜纂欄」が出来たから何か書けとのこと、私は會遊のレヴンテに關する自分の古昔感のうちから目下の大戦亂殊にその戦後の一重要問題の中心たるコンスタンチノーブルの思ひ出の糸を手繰り出すことにした。しかし否な因て、私は先づ自分の

土耳其帽の懷古から始めるの自由を許して貰ひたい。

私はトランクの底ふかく八年このかた今も尙ほ一つの——自分だけの——珍寶が秘藏してある。それは、一九〇九年の春西航途上、私の船が暑苦しい退屈な印度洋航海を了へてポートサイドに寄港し、涼しい多年夢寐の間にあこがれて居つたレヴンテの風に吹かれながら、その十日ばかり前に「青年土耳其」の第二革命が破裂して終にスルタンアブヅル、ハミツドの廢立を斷行した(四月二日)の新聞に始めて接した時、偶船の甲板に來たアラブの賣兒から自分の歴史感がそゝる好奇心に惹かれて購ふた一個のフェツツであるのである。その價僅かに一志。

やがてレセツプス銅像の下を船出して、クレタの島蔭のあたり通過の一夕、つれづれ慰むる内外人聯合のファンシ・ボールの催しに、一つは藝無

し猿の自分のしやうことなさに、殊には一つは自分ひとりながらの興趣をデモンストレートするために、私が得々として冠つたものは同じ土耳其の赤帽であつた。かくの如くして私の氣に入つたオスマンリ紳士の頭の装ひも、それから滯歐二年の間、倫敦でも伯林でも、よしやそのパトロンのはしやぎまはる機會が多少あつたにしても、さすがに西方基督教世界の交際場裡に誇示せらるゝ光榮に浴し得なかつた。

一九一一年の春が來た。私はいよゝレワンテ巡禮に上つた。自然、私のフェツツは數多からぬ私の半歐半亞の旅調度の同勢に加へられた、固より主君萬一の場合に花々しく役立つべしとの譯でもなかつた。私はさながら十字軍の武士の如く赤鬚王バルバロッサの故國から進發し、古來今往世界史の大動脈の隨一たるダニウブバルカンの大道を、過去四十年來西歐文物の大輸送機關たる巴里君府

間の鐵道に依りて東南に下つた。バルカン諸國の第一關門たるセルヴィヤの都ベルグラード及びそれから先々の國々の境に於ける旅行券検査嚴重さは先づ半島の國情の容易でない事を裏切つたが、幸にも到る處、昔はノルマンの猪武士らが君府城下で聖地進軍の路を塞がれ糧食給與を拒まれた苦みといきさつとに遇はなかつたのは、さすがに文明の餘澤である。私は途中安らかなる一夕をソフィヤに明かし、更に乗り繼いであくる朝いよゝ目ざす新月の都へと押寄せた。

汽車は一八七八年露土戰爭の休戰條約の締結で有名になつたサン・ステファンを過ぎて間もなく七樓門（Jedi Kule Kapu） Seven Towers Gate) のほとりて古の城壁を横ざりて府中に入り、右に鏡なす大理石海（モラ）の海岸にそひ、左に府の舊市街地をなす高臺の下を蜿蜒としてめぐり進み、スルタンの後宮の立ちしセライ岬の地角を一廻はりして金角

灣頭の停車場につかんとした。私はやをら身仕度に取りか、つた。私の山高帽現代の十字軍者の兜が見當らない、前晚食堂車に入つた時遺れて來たのである。私は取還しにと列車内を傳ふて食堂車に突進せんとした、食堂車は既に連結してなかつた、私はそれがブルガリヤのであるから昨夜深更國境からソフイアに引き返したと車掌から説明擊退された。私は生憎にも烏打帽さへ持合はして居ない。この時思ひ出されたのは手カバン中に埋もつて居るかのフェツツデであつた。神に謝す私の赤帽は君府城下で私の急を救ふたのである。加之この物が一旦私の頭を占領するや、また自分の胸中の歴史感を唆つて來た。私にはさながら生れながらの國民的禮帽が着飾られたが如き感じが湧いて來た。やがて私は驛前からドロシタを役して凱旋の如く百萬大都の交通の衝たる新大橋を渡り、ガラタの熱鬧の巷をさきり抜け、幾多フランクの往む

なるペラの新市街の友の許に着いた。この二十町以上の道すがら、矗立する幾多のミナーレ、木造のトルコ風格子窓なんどの風物はいはずもがな、往來の人間は世界諸國の色調から成つて千差萬別であるけれども、私の直感が組み立てたる市街印象は自分が最近二年間に見て來た西歐の大都會の映畫とは全く違ふて居る。彼等の服裝はいろ／＼を戴いて居る、否な、自分が彼等と同じフェツツを着て居るのである然り西歐から飛び出して來た東洋人たる自分に映じた彼等の總觀に大體に於て東歐的で亞細亞風であつて、私には何となく自分に近い親しいものであると感じずに居なかつた。そこで私は自分のフェツツが如何にも自分の環境に適ふて居ると思ふて満足したばかりでない、進んで如何にもよく自分一身に似附いて居るかの如く夢みた。路上で私を眺むる幾千百の眼ざしは盡

く是れ自分の紅帽の粹氣なるに感じて居るものと自惚れてしまつた。私はかくの如くして一九一一年一月某日一朝君府の都入りに於て一個の十字軍者から一個のモスレムに改宗されたのであつた。

しかし、ペラの吾が友は十數年間君府在住の邦人である、彼は私を迎へて簡單に挨拶をすまずや否や、じろく私の頭を眺め怪んだ。私は得意げにその由來を物語つた。友はいふ、君よ早く君のフェツヅを脱し去れ、苟もオスマンリ紳士チラエツヂの標章たる赤帽は一筋の皺も一隅のくぼみも尙ほ耻づる所である、君途上に幾多のスエツヅと若干の眞鍮の型とを排べたる店を散見したのであらう、是等はみな路上の紳士のために朝夕着帽の皺をのぼしその形を正すを業とするもので、猶ほ散髪屋の髻そりの如きものであると。私の愛するフェツヅは憐れにも久しく雜物と同居壓搾されて皺だらけになつて居つたのである。私は大に愧ぢ入つた。友は

私を促して大通ダウトルペラのボン・マルシエに伴ひて私に山高帽を求めしめて再び自分をもとの現代の十字軍紳士に還元した。

フェツヅフエツヅはモロッコの首府フェツヅにてかくの如き帽子が大量に産出されたからその地名から起ちたと稱せられて居る。その起源はともかく、これが土耳其スルタンの朝廷で制服の一部と制定せられたのは十九世紀の初め、マームード Mahmud二世(一八〇八—一八三九)の時であつた。爾來苟も土耳其の臣民たるものは公けの場合には必ずこれを着用すべきである。回教信者でなくともその義務がある。ギリシヤ人でもアルメニヤ人でもユダヤ人でも苟も、土耳其の臣民は然り。殊に政府に仕ふる官吏、政府の御用商人の如きは嚴重に之を守つて居る。私は君府滞在中「青年土耳其」の組織開會する土耳其議會を傍聽したが、議員の約五分の一が宗教家でその印として白やいろ

くの色きれのツルバンを戴いて居る、その外は

、みな如上の制帽を着て居り、而もその多數が西歐の意氣な洋服をきて居るのを目撃した。その状眞に繪を見るやうであつたかの土耳其陸軍の組織訓練のために雇はれて居るドイツ軍人の如きもこれまたフェツツを着て居る彼等が歐州風軍服の上にカーキ色の圓錐形の土耳其軍帽を戴いて威風堂々しぱく、ガラタ大橋の上を去來して居つたのは私には頗る面白く感ぜられた奇觀であつた。

私のフェツツは君府到着早々の失策以來復たど用ゐられない。しかしこの一個の些物は今も尙ほ私の小やかなミウゼーの珍藏たるを失はない。それはこれが私のレヴァンテに於ける自分に取りて尊き體驗のかすく、追懷の料となり、かねてこれに關する私の乏しき温古知新のよすがともなつて居るからである。乃ちこれを以て私の「君府思ひ出」の序とした次第である。

二 天下の王城

勝敗がいつれの側に歸し若くばいかに決せられるにしても、來るべき戦後の處分に際して歐亞に跨る老大國が全く基督敎諸國の犠牲に供せらるべきは今より何人も疑はない所であらう。而してこの大なる犠牲が如何やうに料理せらるべきかは尤もふかき興味の存する點である。

昨夕ルーター電報(大正六年十月廿六日發)はロシヤ革命過激派の通信社がこれまで聯合國間に秘密に協定された戦争目的を曝露したと傳へた。是等の目的のうちには土耳其の處分が重要な部分を占めて居る。これによると、ロシヤ帝國政府は君府を中心としてボスフォロスからダネルスまでの歐洲側の土地(背後はミヂヤからエノツクまでを境とす)の要求を起し、之に對して聯合國は亞細亞側に於ける自己の要求に加ふるに君府を自由港とするの提議を出し、ロシヤ帝國政府これを承認したとある。この君府及びその附近の

處分に關する秘密協定はこれまで薄々風説された
 ことで珍とするに足らないが、今やロシア革命政
 府が前朝ロマノフ家傳來の帝都(ツァーランド) (Nikolaev) に向
 ふといふ圖南策を放擲し、一切無償無合併の標榜
 の下に戦局から脱退しつゝ、あるに反して、新世界

の民主的帝國が建國以來の歐米の政局相干渉せず
 といふ根本原則をすて、自ら歐洲の戦局の中に飛
 び込んで來たから、吾人の如上の興味は層一層高
 まらざるを得ない次第である。何となれば由來世
 界人類の自由と平和の尊重擁護を自任し、而も量
 るべからざる巨萬の富を抱き、つまり、精神的理
 想と物質的實力とを充實兼備し時々思ひ切つた突
 飛なる大企業を敢てするを辭しないヤンキーのこ
 とであるから、既に先年アルメニヤ人虐殺事件に
 容喙した資縁もあり、かたぐゝ近き將來の戦後協
 定に於てバルカン及びレヴンテ問題、就中君府の
 支配に關して何等かの干與を試むることが、慥か

に米國參戰の動機にしてはたまた結果の一つであ
 るらしいからである。畢竟この歴史舞臺にロシア
 熊の代りにアングル・サムが現はれんとするので
 はあるまいか。

君府の支配が重要な國際問題であることは一
 七七四年のクチュック・カイナルジ條約以來の最
 近世史の示す所であるから、こゝでは只だこの問
 題の根底を形作る根本原因として君府に固有なる
 地理上歴史上要素を少しく思ひ出してみたい。

私は自分が歐洲航路の沿道と歐亞の旅行とに於
 て親しく目撃した世界的大都會の内、いかにも
 天下無雙の王城たる氣象を完備して居ると思はれ
 たのは只だ君府であると確信する。尙ほ私の見聞
 した旅行家地理學者等も各自の言現はし方の相違
 こそあれ、いづれもしきりに君府の形勝を推賞し
 て居る。

西ではバルカン半島からトラキヤ半島、東では

小アジア半島からビチニヤ Bithynia 半島が、各
歐亞兩大陸間の算盤橋のやうに曳き出されて相接
近し、兩小半島が宛然一つになつて一個の突堤の
觀をなして居る。只だ黒海の水が南流してその間
を侵蝕し、行程三一・七米突のボスフォロス海峡
となつて如上の兩小半島を分つて居る。而してト
ラキヤ半島の下尖端において更に第三の小半島が
分出して金角灣を抱いてそこに自然の良港を藏し
て居る。この一小地角は古代希臘人所謂ボスポリ
オス・アクラ (Bosporos Akra) の Serai 又は
Seraglio Point) といふ尖端を作り、その高地は即
ち君府の歴史上起源たるビザンツ市の創設された
ところである。

都府の地形は後に述べべき別項に譲り、こゝで
はその周圍の地理關係を説きつゞける。即ち市の
南はボスフォロス海峡の水と共に開けて大理石海
となり、この海の水は更に再びダルダネルス海峡

となつて西南に放流する。故に君府の地たるや海
上に於ては黒海と地中海との交通の衝に立ち、敵
北よりすればボスフォロスの上尖端を塞ぎて南方
の海上交通を利して自ら維持し、敵南より迫れば
ダルダネスを閉ざして北方の海運に頼りて自ら生
活する、敵若し南北兩海より來り犯さば南北兩口
と閉塞して大理石海上の資源に倚ることが出来る
のである。この防禦的位置の如何に堅固なるかは
、最近の戰役、殊に聯合軍のダルダネルス攻撃の
失敗が有力に物語つて居る。

陸上に於ては四個の交通線が君府に集中して居
る、その二つは東西に通じ他の二つが西北より東
南に走る。即ちバルカン半島にては、その一はダ
ニユーブ河畔からの連續でベルグラード、ニッシン、
ソフイヤ、アドヤノブルを経て西北から東南に斜
走して、古代羅馬、人種大移動、十字軍さては、
バルカン戰役に於て常に交通の大道となつて居る

ものである。他の一は羅馬人の築造して置いたエグナーヂヤ道 (Via Egnatia) で、アドリヤ海の要港デュラツヅ (Durazzo 古の Dyrrhacium) に

始めてアルバニヤ山中を横ざりて東シオクリダ (Ochrida) モナスチル (Monastir) を經てサロニカ (古の Thessalonika) を經て來るものである。

是等二線はトラキヤ半島にて合一して君府に向ひ其手前七十二キロメートル (兩驛間の鐵道延長) にあるチャタルジヤ Tschatalditcha を中心に黒海岸の Debre os 湖から大理石海岸の Bojnik Tschekmekdsche ま

で横に堅固なる防禦線を劃して居る即ち是れ有名なるチャタルジヤ線で、第一バルカン戰役に於けるブルガリヤ軍の進撃はこゝにて喰ひ止められた實に君府城外の陸上防禦の要害である。亞細亞側に於てもバルカンの二大通路に相當する二大交通線ある、出發點は君府の對岸スタタリの少しく南にあるハイデル・パシヤに在る。こゝから一は今

日のバグダード鐵道線に沿ふて東南に走りシリヤメソポタミヤに達し、他は東に向ひてアンゴラを經てアルメニヤに赴くのである。

されば君府を中心として陸上四線海上二線合計六條の交通線が放射して居る。その内海上交通は北は黒海の諸要港に連りてカウカズス、南露、ルマニヤを縣て中央亞細亞、スカンデナヴィヤ、北獨逸に通じ、南は地中海の各要津に結び、就中アレクザンドリヤを經由する東方並に南方交通を利用し得るのである。

この海道筋が歴史あつて以來常に世界の交通、經濟、政治、軍事に極めて重要であつたこと、換言せば古來世界史構成の要素の一であつたことは想像し得よう。古來この交通線重要視され、隨つてこの線上の然るべき一點に占據して海運と同時に歐亞の陸上交通を制御する企劃は常に一再のみでなかつた。傳説と考古との境に漂渺たるトロー

ヤはダルダネルス海峽の口を制して隆盛となつたものと考定せらるべきである。ペロポネソス役の最後の決戦たる山羊河テリスガス(Aegospotami)のほとりの海戦(紀元前四〇五)は全くギリシヤ世界給養の咽喉としてこの海道を制せんがために戦はれたのである。アレクザンドル大王後の諸將の天下争ひの時その一人がリシマコスがガリポリ半島の上上にリシマキヤ Iysimachia を創立して之に據りたるも同一意味に出て居る。

ビザンチオンの要害も同一理由に因りて可なり早くから希臘人の注意を惹かざるを得なかつた。ペルシヤ戦役の時も、マケドニヤ王フィリップの侵略戦に於ても、羅馬帝政時代の政争に於ても、ヒザンチオンはしほく争奪の的となつた。しかしこの市が世界的重要な地となつて天下唯一の王城と認められ且つこれに作り上げられたのは比較的後世に屬する。それは羅馬帝國の重心が漸く東

方と北方とに傾き、チベル河畔の舊都がこの形勢の變化に應ずる國防の用をしないやうになつた時コンスタンチン大帝の炯眼と手腕とに俟つたこと言ふまでもない。その後の君主や有力者がこの新帝都を擴大増築し防備と美觀とを加へたことは勿論であるが、王城の大體の結構は實にコンスタンチンに窺まつて居る。爾來今日に至るまで殆ど一千五百年間この都は國際の變化、皇室の更迭、宗敎の隆替、國體の改廢、住民の異動、その他一切の變動があつても、常に世界の都たる位置を失つて居らぬ。羅馬は中古を通して比較的近代まで荒れ果てた。倫敦、巴里、伯林は近世の發展のみオスマンリの新月の影淡くなりたる今も尙ほイスラム敎のハリファの皇居、希臘敎會の中心、希臘スラーヴ諸國民の仰望する帝都として古き光ある歴史を維持するものは唯だこのビザンツあるのみである。

近代に於ける君府の記事は有名なるモルトケが
 壯年時代に土耳其陸軍教官としてそこに駐在中に
 報道して居るものに若くものはなからう(一八三
 五年より一八三九年まで土耳其に於ける状態及び
 事件に關する書簡 Briefe über Zustände und Bege-
 benheiten in der Türkei 1835 bis 1839) しかし
 、それは後に引用する機會もあらうから、こゝで
 はしばらく十字軍時代の報道に聽いてみよう。

フレデリック赤髯ゴッドフリードやサラデインと同時代のイ
 スパニヤ在住の猶太の學徒ラビ、チユデラ市の人ベン
 ジャミン (Benjamin of Tudela) は第二、第三十
 字軍の間、まだサラデインがイエルサレムを陥れ
 ない前聖地に參拜し、その足跡は西イスパニヤか
 らイタリヤ希臘を経て東バグダートに及び廣く世
 界を觀た人であるが、この旅行の途次約一一六〇
 年ころ彼は君府を訪ねてその有様を次の如く書を
 傳へて居る。

こゝには多數の商人集り、ために非常に雜沓
 す、彼等は商賣の目的以て海より陸より全世
 界諸國より來る、バビロンとメソポタミヤ、
 メデイヤとペルシヤ、エジプトとバレスデナ
 露西亞、ホンガリ、パチナキヤ (Patzinakia
 即ち Petschenegi)ブルガリヤ、ロンバルヂヤ
 (イタリヤ)及びイスパニヤこれなり。

この點に於て回教の都バグダードを除き全世
 界これに匹敵するものなし (Early Travels
 in Palestine, edit by Thom. Wright, Bohn's
 Library p. 74)

ベンジャミンから約四十年後西方基督敎界の一
 武士は再び吾人に君府印象記を遺して居る。それ
 は第四十字軍從軍の一人フランス人ヴィルアルツ
 アンであつて、その著「君府征服史」に出て居る
 (Vilhardouin, Histoire de la Conquête de Const-
 antinople §128) 。彼は西方武士がボスフォロス

峽頭の世界市の面前に現はれた瞬間の驚きと怖れ
を簡單にしかも有力に語つて

諸君は未だ曾て一たびも君府を見たることな
き者等が之を如何に嚴肅熱心に見守りたるか
を察すべきなり。何となれば彼等は世の中に
かくの如き富有なる市ありうべしとは決して
思はざりしなればなり。彼等の眼前に現はれ
たるは市の周りを環らせる高き城壁と堅固な
る城樓、立派なる宮殿と雄大なる寺院——是
等の數多なるこれを目のあたり實見せざりし
人には到底信じ得じ——かのあらゆる都市の
王者なる都の高さと長さとなり。されば何人
もこの都をみて身震ひを禁じうるほど無感覺
なる能はざりしを思へかし、これ不可思議に
あらず、何となれば世界開闢以來未だ曾て如
何なる人民によりてもかくの如き廣大なる企
てが行はれたることなかりしが故なり。

といつて居る。

されば君府は中古を通じて一千餘年間世界第一
の大都であつた。近時西歐に世界的大都起りて人
口に於ても内容に於ても遙かに君府を凌駕するこ
とになつたけれども、尙ほ南歐及び東歐に於て否
な一切の地中海上に於て人口百萬の大都は他に一
つもない。君府はその歐洲側の部分、即ち狹義の
スタンブールと新市街地たるペラ及びガラタと併
したもののだけにても優に百萬あるらしい。若し通
例人々の通算する如く、二十町ばかり一葦帶水の
スクーターを合計せば人口百十萬乃至百二十萬に
達するだらう。況んやこの人口を形作れる人民の
内容に於てをや。人若し新舊兩市を連結し、また
歐亞各地への水上交通の出發點たる金角灣上のガ
ラタ大橋に立つこと半時間、この邊を往還去來す
る群衆を觀察したならば、君府の益世界的都市な
るを推知し得るであらう。

私は以上述べ來つた所によつて天下の王城としての君府の面目をほんの大體の上から紹介した。以上をいへば總説とすればこれから細目に入るべきである、因てこの次には古來君府の呼び傳へられたる種々の名稱を吟味してこの都が如何にまた世界的であるかを説いてみよう。(十一月廿八日)

慶長年間の京都耶蘇

信徒の墓碑

文學博士 新村 出

大正六年下半年中、京都市西邊の寺院に於て慶長年間の耶蘇信徒の墓碑が前後二回、合せて四基發見せられたるは、奇異なる現象にして所謂南蠻寺院の位置を推定するについて、有力なる資料を提供するもの謂ふべきなり。初回の發見は八月末の事に屬し、其地點は上京區御前通下立賣下る東側に

位するさ、やかなる淨土宗の尼寺延命寺内なりとす。その發見の由來に就きては文科大學助手島田貞彥氏が考古學雜誌大正六年十一月號に報告せる所委曲を悉せり、今更めて贅せず。唯同寺の門前に住し檀家總代の勞を執らる、入江波光氏の注意力によりて該墓石三基が、門内の一隅に見出されし以前、夙く裏の竹籬より移されて一時(同寺改修前)庭前の手水鉢の邊に置かれたることあり、碑面に平假名字の見ゆるが爲め、和歌の墓誌とて誤り稱せられしこともありける由、現住三村便應法尼より聞及べるを附加へおくべし。

三基の墓碑の形狀及び大小の測定は亦島田氏の圖説に詳かなれば茲に擧げず、直に墓銘の説明を試みんか。第一基の面には中央に平賀太郎左衛門まゐい益すの文字あり、右方に慶長十三年三月十日左方にさんおのりよの日と見ゆ。「まゐい益す」の文字を斯く判讀したる外、刻文極めて鮮明なり。